

そ の 他

コロナ禍における臨地実習の現況と今後の実習にかかわる課題について (看護栄養学部栄養学科 座談会)

桑原節子¹ 雀部沙絵¹ 海老原泰代² 河野公子³ 坂口景子⁴
臨床栄養学¹ 栄養教育論² 給食経営管理論³ 公衆栄養学⁴

Situation and Future Prospects of Clinical Nutritional Practice During the COVID-19 Pandemic (School of Nursing and Nutrition Round Table Discussion)

Setsuko Kuwahara¹, Sae Sasabe¹, Yasuyo Ebihara², Kimiko Kawano³, Keiko Sakaguchi⁴,
Departments of ¹Clinical Nutrition, ²Nutritional Education, ³Food Management, ⁴Public Nutrition, School
of Nursing and Nutrition, Shukutoku University

キーワード：臨地実習、管理栄養士養成、コロナ禍

Key Words: clinical training, competence as a registered dietitian, coronavirus pandemic

司会 先生方、この度はお忙しい中でお集まりいただきありがとうございます。

今日の座談会のテーマは、「コロナ禍における臨地実習の現況と今後の実習にかかわる課題」です。そこで、臨地実習に関係していらっしゃる先生方からお話を伺いたいと存じます。どうぞよろしくお願いいたします。

I. 臨床栄養学 臨地実習

1. コロナ禍での臨地実習の実情

司会 それでは、まず桑原先生から本学の臨床栄養学の実習の様子についてお話をいただければと思います。

桑原 昨年、一昨年の2年間は、実習が中止された施設があるということと、多くの病院で実習内容の変更がありました。

特に減少したのが、ベッドサイドのアセスメントですね。また、栄養・食事指導の減少で、集団指導が中止になる施設が結構ありました。幸いに

も臨地実習の受け入れはしていただけただけけれども、栄養指導の見学が中止になるといった、実習内容が変更された施設もありました。

また、本来は病院等の施設内で3週間の臨地実習をする予定だったものが、2週間のみ施設で受け入れて、1週間は学内での実習で補講してくださいという状況で実施となった施設が2施設ありました。施設での2週間の実習後に、症例検討や、給食経営管理の1つとして病態別の献立の作成などを、学内実習として5日間分指導するという状況になりました。こういった学内での実習対応はやはり教員にとって大きな負担になったことは事実であったなと思います。

また、臨地実習中に施設を巡回し学生指導を通常はいたしますが、感染予防のために、学生以外は立ち入らないでくださいというような施設も幾つかありました。実習中のこの巡回指導は、教員が施設を訪れることで学生が安心して、実習先で感じているストレスを解消する役割も担っている

と考えております。今回のコロナ禍ではこのような機会も減少し、学生に対する精神的なサポートが十分にできない状況にあったと考えています。

また、通常時も実習のカリキュラムはその施設ごとに異なっているのですが、その状況に加えて、今回のコロナ禍では、その通常時からさらに内容が変更となり、その変更内容が施設ごとに異なるという、非常に厄介な事態が生じておりました。全ての施設の実習内容変更が同じようであればそれほど問題にはならないのですが、「ある施設はこれは中止だけどこれはできる」、「ある施設は全部中止」、「ある施設は通常通りみんなやります」といったそれぞれの施設の状況を、教員側が把握しなければいけないという状況でした。これらの対応に対し、教員はたくさんの時間と大きな労力を強いられる2年間でもありました。

司会 桑原先生、お話ありがとうございます。大変な状況下での実習だったと改めて感じております。続けて同じ臨床栄養担当の雀部先生いかがでしょうか。

雀部 2020年にこのコロナに対応しなければならなかったことが始まって、さまざまな管理栄養士養成校で、学外実習にそもそも出すのかどうかというところから、学校の判断がかなり分かれていたように思います。

本学は、実学を重視するという教育理念に基づき、学生の学修の機会を大切にすることにより重きを置いて実習に向けて準備をしておりました。しかし、学生実習は受け入れ側の状況に影響を受けますので、行ける学生と行けない学生が出てしまう、この教育の機会に対する不平等に対しどのように対応してゆくのかという議論がされました。しかし、学生の学修の機会を確保することにより優先し、「受け入れていただけたところには、学生を受け入れていただく」ことをお願いする方向に進めることになりました。先ほど桑原先生からお話がありましたように、施設によって実習内容が違うということが生まれ、機会だけでなく教育の内容の不公平感も生まれてしまったという感がありました。

2. 臨地実習の受託側と養成施設の間のジレンマ

桑原 施設側の指導者は、実際の実務がある程度できるような管理栄養士として完成された学生を想定して、実習を受け入れてくれるところがあります。しかし、実際には管理栄養士としてのライセンスもない、また学生という身分で栄養ケアに関する決定権もない状況で、実習をお願いしているというのが教員側の認識です。本来は、こういった実習施設と教員側での認識のすり合わせをしてから実習にいてもらうということが必要なかもしれませんが、現実的にはこのような両者の認識差が実習において問題となることも少なくありません。

学校では、それぞれの教員が教科書的に極めて基本的なことから学会や論文で議論されているような最新の情報まで多岐にわたって教授しています。しかし、実際に実習に行ってみたら、授業で聞いた話と違っていたという状況になることもあるわけです。中には率直にこのような意見を施設側の担当者に伝えてしまって、言い合いとまでいかないにしても実習先とうまくゆかなくなった、トラブルになったということもありました。こういった問題をフォローもしくはカバーするのが巡回指導の1つの役割でもあります。双方の言葉足らずによる行き違いをきれいに埋め合わせし、施設と学生の誤解を解くことも実は巡回指導の役割の1つでもあると思っています。施設側には学生の状況を説明して理解をしていただく、また学生には「皆さんが考えていることは間違っていないけれど、今はこういった事情があって、現場ではなかなか理想通りにはいかないこともある」といったサポートをすることで、実習が順調に進んでゆくことにつながっていたと改めて感じております。こういった巡回指導ができないままに実習を終了させなければいけない状況下にあったということは、実習受託側・養成施設双方にとってお互い不幸だったと感じています。

雀部 本当にそうだったと思います。これまでも、教員側で緩衝していかなければいけないという状況も多かったように思いますが、本当に先生方のご尽力のお陰で実習が何とか進んでいったのかなというふうに振り返っています。

II. 栄養教諭 教育実習

司会 桑原先生、雀部先生、臨床栄養学の臨地実習について、現状報告また課題等ご提示ありがとうございました。それでは次に海老原先生からお話いただけますか。

海老原 私は本年度より本学に着任いたしました。同じ千葉県内での教育実習についてお話をさせていただきます。コロナ禍が始まりまして、やはり最初は小学校の方も混乱しておりまして、学校側と教育委員会に全て担当教員から電話をかけて、実習が可能かどうかを確認するということから始まりました。学校側に電話しますと、「教育委員会はどのように言っていましたか」と聞かれ、教育委員会に電話すると「他市の教育委員会はどのような感じですか」と聞かれ、それぞれが互いに情報を集めているという状況でした。

けれども、感染者が急増して緊急事態宣言下となった状態では、小学校も閉鎖されておりましたので、実習に行けなかったのですが、夏が過ぎ学校が再開してからは、全員、期間通り教育実習を受け入れていただきました。

教育委員会の先生からは、「外部講師やボランティアも断ってはいる状況だけど、教育実習生に関しては受け入れたい」「教育実習は、学生の人生に関わる」ということで、学校の先生方は実習を受け入れてくださっておりました。ただ、母校実習ですと、県をまたぐ移動もあることもあり、個人の生活管理に配慮が必要でした。学生の実家がある地域では、千葉県は都心部と同様に蔓延地域と捉えられているようなところもあり、学生の出身校によっては、実家等での2週間の隔離期間を取ってから来てくださると指示されたところもありました。そういった場合は、夏休みを利用して実習に行くという工夫をしておりました。

巡回指導の方も、教育実習では全部の実習先に教員が伺うことができました。学校の先生は、かなり柔軟に対応していただいたと感じています。けれども、実習内容は、黙食の徹底、衛生管理の指導などが中心になっておりました。栄養教諭が給食時の衛生管理をするような立場にもなっており、机を拭く次亜塩素酸の濃度の設定や、清拭の際の雑

巾の使い方など細かいところまで指導している状況を実際に体験することができ、コロナ禍の中で栄養教諭ができること、管理栄養士ができることを学ばせていただくことができたと思っています。司会 海老原先生、お話ありがとうございました。教育の場では「教育する」ということが、実習受け入れに対しても大きく影響していたということですね。それでは、坂口先生、公衆栄養学実習ではいかがでしたでしょうか。

III. 公衆栄養学 臨地実習

坂口 私も本年度より本学に着任いたしましたので、他大学の事例にはなりますが、お話をさせていただきます。臨床栄養学実習と同様に、「コロナ禍」が理由となって、実習が中止になる施設と、事業はあまり見せられないですがいいですよって言うてくださる施設とで、二極化いたしました。その後、完全に中止となった施設での実習に対しては、やむを得ず学内実習にいたしました。

そして、実習期間が終わってからの学生からの声を聞いてみますと、「行かせていただいたのは良かったが、事業や研修会がすべて中止になったので、過去の資料を拝見したり管理栄養士の先生からのお話を中心だった」と、やや不満を訴える学生がおりました。この一方で、「離乳食教室などを、コロナ禍ではあるけれど、工夫してやっていた」と、コロナ禍という状況下であってもそれぞれの事業を工夫すれば実施できるということを体験できいろいろ学べましたと、満足して帰って来た学生もおりました。

学内実習は、現場の先生方に講師として来ていただいて、学内教員がコーディネートし実際の業務についての解説や、演習もカリキュラムを組んで実施いたしました。現場の先生には非常勤講師としてご担当いただき、現実的な話を伺うことができ、学内実習を受けた学生は満足度が高く、充実した内容で良かったですといった意見が多く聞かれました。実際の臨地実習では、実習に行った期間で実施されている事業は見学できるけれども、実習期間にない事業もあるという現状があります。しかし、学内実習では、一通り保健センターや保健所での主要な事業を組み入れたカリキュラムを

学生に提供でき、網羅的な学習につながりました。

実習終了後に、臨地実習として学生を引き受けてくださった先生方は、学生の指導も重要だけれども、コロナ禍での業務もしっかり回さなければいけないという状況にあり、先生方自身が学生実習に対してとても苦慮されていたことがわかりました。司会 先生方の思いとは裏腹な学生の意見、ある意味わかるような気がします。こちらとしては苦肉の策で工夫したことが、かえって功を奏し、よかれと考えて現場に送り出したとしても今回のような状況下では実習受け入れそのものに苦慮することも少なくないということですね。坂口先生お話ありがとうございました。

IV. 給食経営管理論 臨地実習

司会 それでは河野先生お話をお願いいたします。河野 給食経営管理論臨地実習は特定給食施設での実習となります。特定給食施設は、保育所、学校、事業所、自衛隊、高齢者施設、病院と対象者が異なることから、それぞれの施設の特徴を理解し、多職種との連携の重要性も含み、多くのことに気づき、学びが深まることを望みます。

これらの臨地実習受け入れ施設での実習を通し、大学で学んだ知識や技術がどのように活用されているのか、どのように作業されているのかなど、実際にその場に行くことによって学ぶ・感じ取る・理解するというにつながります。実際にその場に身を置くことでしか学べないことがたくさんあります。

私は、本年度から着任いたしましたので、以前勤務していました他大学での経験となりますが、コロナ禍での実習についてお話させていただきます。

まず実習の受け入れ状況についてお話ししたいと思います。高齢者の施設では、家族との面会もご遠慮いただいているという状況下で、高齢者施設のほとんどは、例年実習を受け入れてくださっていたところであっても、「申し訳ない」と実習を引き受けていただけない状況でした。保育所も同様で、9月から実習が始まるにも関わらず、8月になってから実習を受け入れられませんという連絡がありました。いずれの施設もぎりぎりまで実習受け入れを検討してくださいました。

小学校や学校給食センターなどは、受け入れてくださる施設もありました。ところが、テレワークの広がりとともに学校での授業もWebなどの利用が始まり、登校しない、つまり給食もないという状況や、先生方も交代で学校での勤務をするということがあり、こういった状況下では学生の受け入れはできないという施設も少なからずありました。また、8時半～12時、もしくは14時終了のように時間を短縮した受け入れや、給食提供の部分は実習できないので、献立作成が中心となる実習内容に変更されて受け入れていただくということもありました。栄養教諭や学校栄養職員もテレワークとなり、その間、対面実習は教務の先生や教頭先生が対応してくださいました。その際、管理栄養士の先生が、事前に担当してくださる先生方に、「こういうことをお願いします」と教育内容をしっかり伝達しておいてくださったので、課題もわかりやすく取り組んでいたように思います。実際にその場に行って、体験する・経験するということが学びだと私は考えていますので、大変貴重な経験をさせていただきましたことに感謝します。

コロナ感染拡大の中、学生の半数は実習を受け入れていただくことができない状況下で困っておりましたところ、私が長年勤務していました病院の仲間達が給食経営管理論臨地実習を受け入れてくださいました。また、新規に開設された学校給食センターに実習生を受け入れていただくことをお願いし、全ての学生が臨地実習を行うことができました。

受け入れてくださった施設によっては、ビデオやDVDを独自に作成し対応して下さり、日々、実践されております内容のビデオやDVDだったので、大学で学べなかった知識が得られて良かったという学生の声もありました。

日本栄養士会や千葉県栄養士会、給食経営管理学会等で、給食実習のカリキュラムを有料提供してくださっていて、利用できるシステムとなっておりますが、講義形式、演習形式でしたら大学で行えます。臨地実習では学生自身が、自分の現在の技量や、現在の自分に不足している部分を認識し、もっと勉強しなくてはと思ってもらえることに、実習の意義があり、卒業後、専門職として、

社会人として活躍してほしいと考えております。

V. 臨地実習における課題

司会 河野先生、お話ありがとうございました。

給食経営管理論臨地実習受け入れ施設において、いずれの先生方も実習内容の差異について配慮され、学生が学ぶ機会を均等に得られるような工夫をされていたということが実習先事前打ち合わせおよび実習中の訪問時の会話、学生による実習ノート記載内容や報告会等でよくわかりました。

1. 実習における教育体制と意識の相違

桑原 コロナ禍限定ではないと思いますが、臨地実習は、実習受け入れ施設それぞれの「差」が教育効果に影響を与えている可能性があると考えています。それは施設の設備や環境ということだけではなくて、非常に語弊があるかもしれませんが、施設を管理するリーダーの管理能力やその考え方が、学生の実習に対する満足度に影響を与えていると感じることが多々あります。

実際、臨地実習を終えて学生が学内に戻ってくると、「病院の仕事は非常に大変だと思っていたけれど、管理栄養士の先生に出会って、とてもやりがいのある仕事だということを肌で感じた。だから私はそういうところに就職を希望します」と、それまでは病院での仕事を考えていなかった学生が、病院での勤務を考えていますと話す学生もおります。このようによい体験を実習でできて、自分のやりたいことがはっきり見えてくる場合には、本当に「拍手喝采」という気持ちになります。けれども、残念なことに逆の場合もあって、1年のときから病院を希望していたけれども、「病院での仕事は、自分には向いてないと思います」という学生もいます。その向いてないという表現は、実は「病院の管理栄養士に向いてない」のではなく、「病院は、自分が期待していた職場ではない」「自分が考えていた病院での管理栄養士像ではなかった」という意味だと思うのです。

このような思いを学生に抱かせる要因が、私が申し上げている組織による差にあるということだと思います。私たちはこの差を埋め切れることは難しいと思っており、学生に均等に与えられるべき教育が、

実は施設間の差が要因となって実践できない。この問題は、大学という立場だけでは、解決が難しく、そして非常に大きな問題だと思っています。これらは、臨地実習における永遠のテーマの1つとも思っています。これらの差をどのようにして埋めれば、実習内容の均一化、そして教育の均一化につながってゆくのか、そして、学生へ伝達すべき管理栄養士としての体験をどのようにすれば均一にできるのかということが、この臨地実習という中で考える時期に来ていると考えています。

司会 施設間の差ということは、実習生を教育する担当者となる管理栄養士自身によるリーダーシップの差が大きいのということでしょうか。

桑原 実習の受け入れに対しても、同じような環境や感染状況の地域でも、積極的に受け入れてくれようとするリーダーもあれば、消極的な施設もあります。今回の感染拡大といった同じ環境下であってもその対応の大きな格差は、リーダーの決定力にあると常々に考えています。一般的には施設のリーダーとは、院長や理事長を指すことが多いのですが、臨地実習受け入れに関しては栄養領域での長である管理栄養士が責任を担っていることが多いので、これらの管理栄養士が臨地実習の受け入れに対してどのように考えているかということが、今回のような状況下では実習生の受け入れ如何に大きく影響を与えてしまうのです。自分に与えられた環境で、その後継者を育成するために、リーダーとしてどのように考え、どれだけエネルギーを使うのかという観点での温度差はとても大きいと思います。

このリーダーとしての管理栄養士の温度差、そしてそのリーダーが所属する施設間での差は、コロナ禍の中でさらに大きくなってしまったように感じています。

患者さんに接することは避けましょうということであっても、「全く病棟に足を踏み入れることを許さない」というところから、「1～2m離れてちょっと見学していなさい。私が患者さんと接するところを見て、どう考えるかを考察しなさい」と言われた場合の教育的効果は全く異なりますね。そこに「連れてってもらっている」、「連れてってもらえない」というだけでなく、「どう考える」

という方向性を示すことは、医療職としての方向性をしっかり示していることだと考えています。司会 栄養という職域の中で、そのリーダーである管理栄養士の中に、後継者を、後輩たちを育てていこうという意欲や、ころごしがあることなのですね。

桑原 そうですね。そういうところはやっぱり差があるのかなというふうに思いますね。自分たちもいい実習させてもらったら、やはり自分が管理者になったときに、いい実習をさせてあげたいという、その良い循環を作っていくことが大切だと思います。

やはり、管理栄養士の養成の段階から、自分たちは成長していった管理者になったら、また還元して教育をする立場になるのだということを、学生のうちから考えられるように、私たちも教育していかなければいけないと考えています。けれども、まだそこがもしかしたら、足りてないのかもしれないと思っています。本当に臨地実習でのこれらの施設の格差すなわち、管理栄養士のリーダーとしての資質の差は、とても大きいと思っています。

河野 病院は、複数それぞれの専門部署が確立されている施設ですが、それ以外の給食施設は、栄養士・管理栄養士が一人ということがほとんどですので、管理栄養士と保育士等の他職種が連携して業務をすることがほとんどですので、事前に管理栄養士の先生が他職種との調整をしてくださっていたことで、学生の実習も受け入れしやすいということはあるかもしれませんね。

でも、逆に、保育所であれば所長先生、園長先生、高齢者施設であれば施設長などがいらっしゃると、管理栄養士の先生は「いいですよ」と言ってくくださるけれど、そのトップの意見が大きく影響されることはあると思います。規模が病院に比べて小さいので、管理栄養士一人の意見がなかなか通りにくいことはあると思います。

桑原 トップの意見がかかわりますね。

河野 そうです。そのため病院では考えられないと思いますが、実習期間中の実習ノートも、校長先生や園長先生等もご確認、ご指導くださいます。対象者に合わせ、安全・安心・美味しい給食提供

を実施するために管理栄養士一人ではできないことを他職種が連携しながら行うのが給食部門の特徴になると思います。そのため、関わりのある方々からのご意見が実習そのものの受け入れ態勢に影響することもあるのだと思います。

司会 給食の場合でも、桑原先生がおっしゃっていたリーダーシップによって少し内容が変わったりするのでしょうか。給食経営管理は、衛生管理や作業工程などが中心となる実習となるように思いますが、いかがでしょうか。

河野 そういった一面もあります。給食経営管理の場合は管理栄養士あるいは栄養士一人の勤務体制であり、高齢者施設の場合は採用されて勤務年数が経過してそれなりの経験、実績を積みリーダー格となることもありますし、保育所や学校、事業所では経験の浅い若い方が勤務され、数年で異動となるケースがあります。臨地実習では、組織的な動きというよりも、主体的に給食業務を実施している様子や施設の見学、体験となりますが、コロナ禍では、対象者と直接的に接することは避け、掲示資料やカードを作成し間接的な関わりを持つ方法等、状況に応じた様々な体験をさせていただきました。給食経営管理は、給食運営のマネジメント、栄養・食事管理、献立・品質・生産・食材管理、安全・衛生管理、施設・設備管理、経営・マーケティング・顧客管理、危機管理等多角的となり、管理栄養士として栄養・給食部署のリーダーとなることから多くのことを体験し、学びを深めてもらいたいと思います。

海老原 教育実習はやはり後輩を養成するっていうこと1つの職務として認識していると思います。人を養成するのが職務の人々なので、実習生、母校実習を断るということはないんですね。

ただ、地域によって実習生の受け入れ条件が少し異なっています。例えば、東京都の採用試験を受けない人は実習を受けてもらえない。船橋市は、市内の高校卒業者に限るといった条件は決まっています。けれども、その条件をクリアすれば受け取ってくださいます。通常は、教育実習担当の教務主任がいらっしゃるのですが、栄養教諭の場合はいらっしゃる時もあります。ですから、できるだけ栄養教諭がいらっしゃる場所で実習をす

るといことが、この実習の教育の質保証になっているように思っています。ただ、千葉県は、全部の小中学校に栄養教諭が配置されているわけではないので、これらの質保証が難しい状況にあります。このような場合は、担当のセンターの栄養教諭ってというのは決まっておりますので、実習期間中にそこの先生方の指導を受けられるようお願いをしています。

指導案を作って、授業を1回することが目標となりますが、大体の授業は一般の教員の先生に見ていただき、栄養の内容については栄養教諭をお願いして確認していただくような工夫をしています。

けれども、まだ栄養教諭が全校配置にはなっていないので、どうしても「栄養教諭の実習って何」と言われることも多く、うちじゃ指導できないからって言うてお断りされるときもあって、そのときは栄養教諭がいらっしゃる大学近辺のところを手配するようにしてますね。

やっぱり後輩を育てるということを、教育実習の決まりに掲げており、教員になるために必要な実習であって、資格を取るためだけのものではありませんってということも、大学の指導の手引や文科省の教育実習にかかわる文書にも明記されています。また、授業の最初にそれを学生もこれらを読んでます。

河野 文章として明記されているということは共有事項を認識するために有効と考えます。

海老原 先生方は授業に関わらなければいけない時間を、実習生のためにその時間を割いてくださってる。これらの経験を通して、学生自身に対して「君たちも先生として将来進んでゆくんだ」という教育をしているのだと思います。

司会 教育をする施設である、教育の場であるということが、桑原先生のおっしゃっている教育に対する格差が小さいということにつながっているのですね。

河野 食育も教育の一環であるということから、栄養教諭教育と同様な考え方ができると思います。教育には時間が長くかかりますよね。それと同じように、食育も給食を通して長時間かけて学ぶ必要があります。このような意識を持って食育に関わってくれるような施設は、栄養教諭や栄養専門

職員が必要という考えにつながってゆくのだと思います。今後は、全ての給食提供施設において栄養教諭や栄養専門職員を配置することで地域は勿論、国民の健康管理を担う専門職として活躍してもらいたいと考えます。

2. 後輩を育てる意識づけ

海老原 私は管理栄養士の一人として、やはり管理栄養士側から学生を見るのも後輩を育てる。育てることも仕事だって思ってもらってというのも、栄養士教育の中で必要だと思えます。

先ほど桑原先生のおっしゃった、学生のうちからいずれは自分たちも教育する立場になることを受け入れながら、教育されてゆくことが大切だと思います。

公衆栄養では実習費をお支払いできないこともあるので、しっかり教育も行いそれに対する対価として実習費が受け取れるようになることも必要だと思います。教育も仕事の一環であるという認識のもとに。請求してもよいのではと思うんですね。実習生を教育することも仕事だと思うことにつながると思います。

桑原 現状は、実習費の支払いとその教育内容の是非に関係がないということが問題だと思っています。教育の質に関係なく一律に実習費は支払われる。一生懸命教育しても、実習費に差があるわけでもなく、また教育担当したスタッフに支払われるわけでもない。

私たちの時代は、「自分がやろうと思って、やれる事はなんでもやりなさい。無理があってもやりなさい」という教育を受けてきて、それが正義であり、正義を通すことができた。今の学生は、「支払いに転じない事はやらない」が正義であり、無理なことはしない。「それ相応の対価がなければことは起こさない。それ以上の支払いを受ければやります」が社会通念になってきている。昔と今では社会常識が変わってしまっています。

この患者のためになんとかしよう、このアレルギーがあるお子さんに対して工夫して喜んでもらって成長してもらおう、という「気持ちや感情論」は通用しない。私たちが言う「一人前になるまで、一生懸命努力しなさい」ということは、今の若い

学生には通用しなくなってきました。できてもできなくても、朝8時半に入って5時までいったら、ちゃんとそこは労働の対価として支払っていただきますということが、今の労働に対する論理になっていると思いますよ。

我々の常識を今の学生に謳うことはできないですよ。そして私たちの常識を伝えようとする事自体がもうパワハラになってしまうのです。このような時代の変化に対して、私たち自身も学生たちの価値観を念頭に入れた教育を考えて、学生自身が納得してその業務に就けるということを考えた教育が必要となってきているだと思います。単純に自分の体験を伝授するようなことでは、もう受け入れる学生はいない。それが現実だと思います。

教員自身も変化して、今の学生の感覚を意識しながら、「ああ、そうだね先生、その通り」という学生の視点に立った教育方法を考えてゆかないと、後継者そのものがいなくなってしまう可能性がある。「管理栄養士という仕事は、大変だけど生きがいがあるよ」というだけでは、今の学生は受け入れない。そのぐらい変わってるのです。

海老原 薬剤師さんは病院の就職希望が減ったと伺っています。

桑原 募集しても、きついから。調剤薬局のほうが給料いいと知っているのでそちらを選ぶ。昔は医療職の多くは、自分の経験をどれだけ高められるかということに価値観を置いてたので、給料はそんなに多くなくても良かったんですよ。だけど今は違うんですよ。

司会 すごく教育が難しい時代になってるんですね。学生そのものの意欲やモチベーションの低下だけでなく、学習能力も低下している可能性があるにも関わらず、給料はほしい…私にはなかなか納得できないところもありますね。

桑原 その納得できないのが、やっぱりgeneration gapなんですよ。

3. コロナ禍における実習課題や対応

雀部 当初は実習が中止になった場合ということとをすごく考え、施設の先生に、少しでも施設の事を教えていただけるような代替案はないだろうかということも何度も検討をしました。例えば、

遠隔で講義をしていただくとか、施設の中のビデオで撮っていただいてそれを活用できないかなど検討しました。

臨地実習での情報の共有化と学生自身の学びの発表の場として報告会の在り方についても、考えることが必要でした。本学では、コロナの前は対面でポスター発表を行っておりとても好評でした。学生同士でざっくばらんな話ができることや、先生方ともあまり気兼ねせずディスカッションができるということも、すごくメリットがあったのですが、このコロナ禍で中止せざるを得ませんでした。一旦中止したものを、感染症対策を講じながらどのように実施するかということも考えなければいけない課題と思っています。また、先ほど先生方が、「後輩を育てる意識づけ」とおっしゃられたところにつながるかと思いますが、このポスター発表に施設の長の先生方だけでなく若手の先生方にも参加していただき、学生教育という視点で見えていただく機会としても活用していただける方法を、今後考えていけたらいいのかなと思いました。

こういったコロナ禍がなければ考えなかったことだと思いますが、今後、感染症という問題だけではなく、社会情勢などの変化に対応しながら、臨地実習という教育を今後も維持し続けるためには、柔軟な姿勢が必要になるということも、私自身も学ばせていただきました。

海老原 教育実習ノートに体調記録のページがなくて、今年は臨地実習で使えるものを使わせていただいたんですけど、ちょっとやはりそこら辺は教育実習の方でも様式をちょっと整えて、実習先に求められたらいつでも提出できるように準備をしていこうかなと思っています。

給食の配膳などに関わるところもあるので、今年は全員に健康診断の診断書の携帯と、細菌検査をしましたので、少しコロナ対策と合わせて、そういう体調管理のところを教育実習のときに丁寧にやっていきたいかなと思っています。

坂口 あとは、そうですね。これはコロナ禍には関わらないのですが、実習先の先生から、おとなしくて積極性が感じられないという意見をいただきます。「質問何かありますか」と聞いても、「大丈夫です」という返事で、質問がないというより

も、実習そのものに対する反応が感じられないというようなご意見をいただくことが多くあります。こういった意味では、コロナ禍だからというわけではありませんが、学内の事前指導として、自分の考えをまとめて発言するといった教育も必要なのかなと感じています。

また、公衆領域は今5日間を、学生が保健所と保健センターを両方に行けるように組んでいきます。一人の学生が5日間で保健所と保健センター両方を入れるっていうのは、有意義でいいと思うのですが、その一方で、1施設での実習時間が短くなってしまふという欠点もあります。どこまで学生がその保健所と保健センターの両方の役割の違いだとか、その連携がどうなっているかっていう辺りを、系統的に理解できているのかなというのが課題と感じているところです。

桑原 臨地実習では、2週間前から行動制限かかり、実習前にはアルバイト禁止になりますが、それを1年目は学生自身も感染が怖いということで守ってくれました。ところが、今年も同様な対応を指示しているのですが、本当に指示を遵守しているのかということが問題だと思っています。実

習前には、ワクチンの3回接種を勧め、準備万端で体調を整えることを、学生自身がどこまで自らのこととして考えて行動してくれるのかということが、今年の課題のような気がします。みんな感染の状況に慣れてきてしまっている。マスクはさすがに外さないとしても、いろんな行動が広がっている。このような状況の中で実習に行くという自覚と、実習に向かうための準備についても捉えて欲しいと思っています。

司会 本日は、長時間にわたり、実習の現状並びに現在抱えている課題等についてもお話いただき、誠にありがとうございました。管理栄養士としての活躍の場が多くあることは、大変ありがたいことではありますが、そのためには多方面での実習をしてゆく必要があり、その実習によっても課題があること、また、教育的視点や教育の質の担保といった内容まで踏み込んだ話をしていただき、学校教育と実務教育の連携を改めて感じております。

大変、有意義な時間をありがとうございました。

(了)

(実施日：2022年6月9日、司会：阿曾菜美 藤谷朝実)

